

頭陀袋 ⑤6 平成二十九年二月号

発行 中山かんのん

恩林寺



中山中学下、電話三四一―二四五

黄檗の僧 了然りようねん尼の逸話

了然尼は幼名を「ふさ」と言いました。京都の富豪、屑山為久の長女として生まれ、東福門院の孫に仕えたといわれています。十七歳で医師に嫁いだのですが、結婚に際し、子供が三人で出来たなら離婚することを条件にされていたようです。そうして二十七歳の時、離婚し、出家後は了然と名乗り、後水尾天皇の皇女、宝鏡寺の宮（久巖禅尼）のもとで尼僧の修行をされました。三十三歳の時、江戸に赴き、最初、黄檗僧として著名な鉄牛禅師に弟子入りを乞われたのですが鉄牛禅師はその美貌のため、断じて入門を認めませんでした。

やむなく了然尼は鉄牛禅師と同門の白翁道泰禅師を訪れ入門を懇願されましたが、白翁禅師も同様に「尼僧の容姿の美しいのは仏道修行の妨げになる。」として、またしても拒絶されてしまいました。途方に暮れた了然尼は門前の民家でやすんでいるとき、妻女が使用している火のしこてが目に入りすぎさまそれで自分の頬を焼き、醜い顔になりました。その後、さつそく自作の詩と和歌とをつくり、焼けただれた顔で白翁禅師に再度入門を懇願されたといわれています。

禅尼の詩 * 昔宮裏に遊んで蘭麝を焼く 今、禅林に入って面皮を焼く

四序の流 亦斯くのごとし

知らず誰か是れ箇の中に移ることを。

（大意）昔は宮中でお香をたいていたが今はこうしてわが頬を焼いている。

四季の移り変わりとはこのようなものだ。誰もが一時、一時の変転の中にいるのだ。

和歌* 生きる世に捨て焼く身や終ひの薪とおもわざりせば。

とうとう白翁禅師も根負けされ、了然尼の入門を認められ、黄檗僧、了然総尼がここに誕生しました。

了然尼は五年の修行の後、白翁禅師の法を継がれました（免許皆伝）が、それを見届けるように白翁禅師は示寂（なくなる）されたそうです。了然尼は師匠の恩義に報い泰雲寺というお寺を建立し、六十六歳まで生きながらえ、たくさんのお書画を残されております。

恩林寺本年の行事予定

一月元旦 下岡本三寺参り（祝賀）

三月十九（日）春のお彼岸会、涅槃忌

五月 六日（日）檀信徒お楽しみ会

六月二十五日（日）お施餓鬼法要

八月十一日から十七日 お盆棚経

（市内、上野、国府、古川）

八月三十日から九月一日まで

旧お盆棚経

（下岡本、中山、西の一色）

九月二十三日（土）秋の彼岸会

十一月十一日（土）観音講法要

黄檗宗管長猊下御親修

（行事受付時間等、詳しくはお知らせいたします。）